

〔研究論文〕

「女性の経験」と知識の社会的組織化
－ドロシー・スミスの IE に依拠した『82 年生まれ、キム・ジョン』の読解(1)－

上谷 香陽

〔Article〕

‘Women’s Experience’ and Social Organization of Knowledge:
Reading *Kim Ji Young Born 1982* from Perspective of Dorothy Smith’s IE.(1)

Kayo UETANI

Abstract

The purpose of this paper is to read a Korean novel *Kim Ji Young Born 1982* from the perspective of Dorothy Smith’s IE(Institutional Ethnography). This paper argues that this novel describes the same kind of ‘women’s experience’ as women’s movement in North America has questioned since late 1960’s. Based on Smith’s article about ‘women and mental illness’, this paper examines how institutional discourse rules and regulates ordinary way of knowing through the social organization of knowledge in institutional process.

There is a disjuncture between primary narrative of people’s experience and ideological narrative in institutional discourse. Primary narrative is used as raw material for producing ideological narrative which is described as factual account of people’s experience. Ideological narrative subsumes what people know from their actual experience as a case or an instance of the universalized concept of the discourse. In producing factual account, primary narrative of people’s experience is reassembled by the interpretive schema of the discourse and displaced by objectified knowledge. Thus the disjuncture between both narratives is concealed.

In this process of social organization of knowledge, interpretive schema of the discourse selects from primary narrative only what is accountable within the discourse. Inspired by the women’s movement in North America, Smith critically reconsiders the way of constructing the ‘women’s experience’ which has been taken as illogical and often treated as mental illness by psychiatric factual account. She explicates that such ‘experience’ is produced through social organization of knowledge in institutional process, where institutional discourse operates to exclude what women know from within their everyday and everynight actualities.

Following Smith’s sociology, this paper considers the way of making an alternative sociological description which makes use of the language of everyday life as the basis for investigating the social.

1. はじめに－精神科医の診療記録としての「女性の経験」

韓国で2016年に刊行され、2018年に日本語版が発売された『82年生まれ、キム・ジョン』は、「33

歳の主婦の半生を通じ、韓国の女性なら誰もが経験するような男女の不平等や苦悩を描いた」⁽¹⁾小説と紹介されている。この小説は精神科の診療記録という形式をとっており、内容の中心である主人公の「半生」は、主治医がカウンセリングの過程で聞き取ったことの記録として提示されている。このような形式をとった理由について筆者は、「韓国内のニュース記事や統計資料などの客観的な資料を並べて書くので、それに違和感を持たせないために、報告書という形が合っているのではないかと思った」、そして「報告書を誰に語ってもらうのがよいかと考えたときに、話をずっと聞いてきた精神科医が報告書の形で書いていくという構成をつくるに至った」と述べている⁽²⁾。本論では、この小説が精神科の診療記録という形式で構成されているという点に改めて着目し、そこで描かれている「女性の経験」のあり方について、社会学的な考察を行ないたい。

以下の議論で論点にしたいのは、この小説で描かれている韓国の「女性の経験」と、1960年代末の北米における女性運動において提起された「女性の経験」との接点についてである。北米においてはおよそ50年前の女性運動(women's movement)をきっかけに、「女性」という性別のあり方をめぐるある種の経験の構成のされ方が、社会的な問題として世の中に提起されるようになった。当時の北米において、女性が妻や母として家庭の中で家事や育児を一人で担うことは自明のこととされていた。仮にそのような結婚生活のスタイルに違和感を感じていたとしても、そのような感情を夫と共有することが困難であったのはもちろんのこと、そもそも、自分の感情を適切に言い表しうる言葉を見つけること自体が本人にとってさえ非常に困難だったのである。そのような「女性たちの苦悩」は、個人や家庭という私的領域に閉じ込められ、長らく表に出てくることはなかった。近代社会において自明視されてきた「女性」のあり方と矛盾するような感情や行動は抑圧され、存在しないことにされてきたのである。

1960年代末の女性運動をきっかけに、この「名前のない問題」の存在が明らかにされ、そうした問題を生み出す社会的なメカニズムが問われるようになった。小説『82年生まれ、キム・ジョン』で描かれている韓国の「女性の経験」には、かつての北米の「女性の経験」と同型の問題が見出しうると考える。そしてそのことと、この小説が精神科における診療記録という形式で構成されていることは無関係ではないと考えるのである。この点について論じるために、本論では、カナダの社会学者ドロシー・スミスの議論を参照する。スミスは、1960年代末以降の北米における女性運動に触発され、上記のような「女性の経験」が生み出されるメカニズムを社会的に探究してきた。「sociology for women(女性のための社会学)」「feminist sociology(フェミニスト社会学)」「institutional ethnography(インスティテューショナル・エスノグラフィー)」と呼ばれるスミスの社会学に通底するのは、社会において自明視されているものの見方を、それ自体、社会的な探究の俎上にのせることはいかにして可能になるのかという論点である。

1975年初出の「女性と精神病」の議論をめぐる論考(Smith 1990a: 106-138)の中でスミスは、北米において「mental illness(精神病)」という概念が、精神医学の専門的領域を超え、日常生活の中に広く浸透していることを指摘する。日々の相互行為の中で互いがあてにしている「正常性」に齟齬をきたした時、人々はこの概念を自他の行為を意味づける枠組みの一つとして使用し、精神医学の諸機関(institutions)へつないでいたことが指摘されるのである。それまで自明視されていた「女性」のあり方に疑問を抱くことは、欧米近代社会の基盤とされてきた家族観(近代家族)や、世の中に広く浸透している「まっとうさ」に対して疑義を差し挟むことでもあり、まさに日常生活における「正常性」を揺るがしかねない事態であった。前述の「女性の苦悩」は、「持つべきでない感情」を持ってしまったことそれ自体に対する、自他の否定的な反応から引き起こされるという側面もあった。北米

において精神医学の諸機関は、この説明のつかない「苦しみ」に対して、個人の行動や感情の問題としての医学的な理由を与え、治療によって解決を図るという役割を担ってきたのである。

2. 「女性の経験」の二重の抑圧

女性運動によって可視化されるまで、北米において、近代社会的な「女性」観に対する疑義は、二重の意味で抑圧されてきた。

一つは、スミスが「標準的な北アメリカの家族(The Standard North American Family: 以下 SNAF)」(Smith 1999:157-171, 上谷 2018a)と呼ぶような、ある種の家族観が自明視され、自然化されてきたことによる。SNAFとは、世帯を共有し法律婚している成人男女のカップルとしての「典型的な家族(The Family)」というものの見方であり、具体的には、「男性は有償労働に従事している」「彼の稼ぎが家族全体の経済的基礎を提供する」「女性もまた、おそらく定期的な収入を稼いでいるが、彼女の最も重要な責任は、夫や家庭や子どもたちのケアをすることだ」「この男性と女性は、あらゆる法的意味において、その家庭に住んでいる子どもたちの両親である」などの特徴を持つとされる。

20世紀初頭以降、白人中産階級の主流の生活様式として浸透したSNAFの特徴は、当初から、北米におけるすべての世帯や家族に字義どおり当てはまるわけではなかった。SNAFが北米社会において「標準」としての力を持ってきたのは、必ずしも、そのような生活様式を送る人々の数の多さからではなく、むしろ、人々の日々の生活の様々な局面で場面横断的に作用する一つの認識の枠型(イデオロギー・コード(ideology code))として機能してきたことによるところが大きい。スミスの言う「イデオロギー」とは、非科学的な虚偽意識というよりは、特定の場所で特定の時間に特定の個人によって行なわれる語る、知る、解釈する実践活動⁽³⁾を制御する、一つのやり方として捉えられている。イデオロギー・コードとしてのSNAFは、これに合致しない世帯内の共同生活のやり方や経済的感情的支援関係を形成するやり方について、暗黙のうちに「例外」「逸脱」「まっとうではない」「正常ではない」などの評価を挿入し、別のやり方を概念的に封じ込めるように作用してきたのである。

もう一つは、教育や医療や行政や経営や法や学問などに関わる諸機関の実務を支える専門的な知識や概念の使用のされ方それ自体が、SNAFというイデオロギー・コードによって制御されてきたことによる。日常生活における身近な他者との相互行為において、SNAFにおさまきれない行動や感情や出来事に何らかの正当性を見出したとしても、それを公的に承認するものの見方が存在しなかったのである。ここで専門的な知識や概念を使用する実践活動とは、専門書や学術論文を書いたり読んだりそれについて話したりすることのみに関わるのではない。そのような言語使用実践活動は、諸機関における日々のルーティン・ワークの遂行や、それらのワークの連係に不可欠な構成要素として埋め込まれている。例えば、精神科の診療で主治医が患者や身内から聞き取ったことがらを「事実報告(factual account)」にまとめるという、記録つけのワークもその一つである。「女性と精神病」の議論をめぐる、スミスは、精神医学の諸機関の実務の基盤となるこの記録作成の過程に着目する。

事実報告には患者や身内から聞き取ったことがらが記録されているが、かれらが語ったことが文字通り写し取られているわけではない。むしろそのようなやり方で記述することは、諸機関の日々の実務を適切に遂行させる上では不適切とみなされることになる。人々が自らの経験を回想しながら語ったことがらは、精神医学に依拠した記録としてふさわしい「事実」の形式に組み立て直される必要があるのだ。スミスの議論は、この記録つけのワークそれ自体が、SNAFというイデオロ

ギー・コードによって制御されてきたことを示唆する。事実報告作成の過程において、この枠型におさまらない行動や感情に正当な理由を与えるような社会的文脈は排除されてきたのである。「女性の経験」は、「起こったこと」を記録するという段階ですでに、論理的なつながりを欠いたそれ自体としては説明のつかない行動や感情の記述に置き換えられ、医学的理由を与えられるべき「病氣」の事例として精神医学の知識や概念に包摂されて行っただと考えられるのである。

小説『82年生まれ、キム・ジョン』の主題もまた、社会において支配的な「女性」観に対する疑義が抑圧されるメカニズムであると考ええる。主人公は、日々の生活における身近な他者との相互行為において広く自明視されているある種の「女性」のあり方に疑問や理不尽さを感じるが、それに真っ向から異議を申し立てることができない。夫は、彼女の苦悩に気がつかず、理解することもできない。ついに彼女に「異常な症状」が現れ、精神科の診療を受けることになる。彼女は「鬱」と「不眠」の診断を受け、治療を継続している。このようなエピソードは、かつて北米において「標準的な北アメリカの家族」に疑問を持った女性たちが直面した「名前のない問題」と同型の苦悩を描いていると捉えることができる。

その一方で、本論では、この小説が呈示する精神科における診療記録の記述は、精神医学における「事実報告」からは逸脱したやり方で組み立てられていると考えられる点にも着目したい。筆者が述べているように、この記録には韓国内のニュース記事や統計資料などからの情報が併記されている。あるいはまた、主人公の行動や感情が具体的な他者との相互行為においてどのように生じているのか、その社会的文脈が排除されず、むしろ詳細に記述されているのである。このことは、この「診療記録」が小説というフィクションの中で創作されたものだからだと考えることもできる。他方本論では、この小説の形式をめぐっては、社会において支配的なものの見方が別の見方の可能性をどのように抑圧するのかという論点とともに、別の見方の可能性をどのように「発見」していくのかという論点においても、社会学的な考察が可能であると考え⁽⁴⁾。

以上のような論点を考察するにあたって、本論ではまず、ドロシー・スミスの議論に依拠しながら、この小説で描かれている韓国の「女性の経験」と、1960年代末の北米における女性運動において提起された「女性の経験」との接点について、明らかにしていきたい。

3. 「女性の経験」をめぐる知識の社会的組織化－権力の概念使用実践(conceptual practices of power)

3-1 「知ること」の二つの様式の断絶

本論では『82年生まれ、キム・ジョン』のストーリーを、カナダの社会学者ドロシー・スミスによる、「女性の経験」をめぐる知識の社会的組織化という論点と接点を持つものとして取り上げる。

1960年代末以降の北米における女性解放運動に示唆を受けたドロシー・スミスは、1970年代から「女性のための社会学(sociology for women)」を展開し、「インスティテューショナル・エスノグラフィー(institutional ethnography: 以下IE)」という独自のアプローチを発展させてきた。抽象的・一般的・普遍的・客観的とみなされてきた思考の言葉(専門的知識)と具体的・個別的・特殊的・主観的とみなされてきた日常の言葉(日常的知識)との関係を問い直すことが、スミスの社会学的探究の主題である。そこでは、「女性の立ち位置(women's standpoint)」、すなわち近代社会において「周辺」化された人々の立ち位置から、「支配的な」知識の成り立ちを解明することが目指される。その上で、日々の生活において自分や他者の身に起こっていることを知るやり方を組織化する、概念使

用実践の力が着目されるのである。

ここで問われているのは、実際の日々の生活において自他の身に起きていることをめぐる、思考の言葉(専門的知識)における「知り方」と、日常の言葉(日常的知識)における「知り方」との断絶である。これは単に、日常の言葉で知られていることを、思考の言葉によって正しく表象できるかどうかという問題ではない。両者は弁別的な意味する方法であり、異なる言語ゲームを行なっているとスミスは指摘する(上谷2021:92)。社会的な知識の産出の場面において、二つの「知り方」の間にはある種の非対称性が存在する。後者の「知り方」は前者の「知り方」の基盤となるが、後者は前者に包摂されうるものとして扱われ、通常は表に出てこない。日常の言葉において知られたことは思考の言葉に置き換えられ、そもそも二つの「知り方」の間に断絶があること自体が不可視にされる。スミスは、1960年代末以降の北米における女性運動によって提起されたいわゆる「名前のない問題」が生み出されるメカニズムを、このような社会的な知識の組織化のあり方に見出したのである。

スミスの社会学は、通常は隠されてしまうこの断絶を可視化し、二つの「知り方」の非対称性が生み出されるメカニズムを改めて問い直そうとするものである。その上で、局所的活動がそれを越えた行為の連鎖や連係と接続するやり方を、日常生活世界を実際に生きている人々が暗黙のうちに知っていることや行なっていることを出発点にして、実際にそれを経験する個別具体的な人々の立ち位置から知り直すやり方が模索されるのである。ここで論点となるのは、二つの「知ること」がいかなる「社会関係」に埋め込まれているのかを探究することである。

「社会関係(social relations)」という用語は、social capitalの日本語訳としての「社会関係資本」における「社会関係」とは別の文脈で使われている。スミスの議論における「社会関係」とは、特定の局所的場面において人々が行なっていることを、他者たちが別の場所で別の時間で行なっている(あるいは行なっていた)こととの連鎖において捉えようとするものの見方のことである。この概念によってスミスは、何かを「知る」ということを、個人の頭の中で起こっていることがらとしてではなく、先行するものが後続するものを意図し、後続するものが先行するものの社会的特徴を実現するあるいは達成するという、時間的連鎖に埋め込まれた諸行為の連係の中で起こっていることがらとして捉え直そうとするのである。その上で、この行為の連係のされ方に注意を払いながら、日常の言葉において知られたことが思考の言葉に置き換えられる際の、両者の「知り方」の非対称性を明らかにすることが目指されるのである。

日常の言葉(日常的知識)における「知ること」と思考の言葉(専門的知識)における「知ること」が接続する具体的な契機としてスミスが注目するのは、人々が何らかのかたちでinstitutionと接触する場面である。スミスのIEにおけるinstitution(s)とは、日本語における「法規」や「社会的な仕組」としての「制度」というよりは、第一義的には、人々の日常生活に深く関与している、教育や医療や行政や経営や法や学問などに関わる諸組織や諸機関や諸施設などのことである⁽⁵⁾。人々が心身の不調を訴え何らかのケアを求めて訪れる医療機関もその一つである。institution(s)は相互依存的に関連する複合体をなしており、単に実体的な組織としてのみならず、「言説(discourse)」を媒介に複数の人々の行為が連鎖し配置される諸関係の交差点や連係として捉えられている。institution(s)をこのレベルで把握する時には、日本語の意味における「制度」も関わってくると考えられる。

スミスは、「言説」を「知識の対象を弁別的なやり方で定式化し認識する、慣習的に規制された言語を使用する実践活動」と定義する。専門的な知識や概念を使用する実践活動は、専門書や学術論文を書いたり読んだりそれについて話したりすることのみに関わるわけではない。そのような言語使用実践活動は、諸機関における日々のルーティン・ワークの遂行や、それらのワークの連係に不

不可欠な構成要素として埋め込まれている。例えば、精神科の診療で主治医が患者や身内から聞き取ったことがらを「事実報告(factual account)」にまとめるという、記録つけのワークもその一つである。人々が自らの身体的存在や身体的行為において生じたものとして知っていることは、言説の内部で記述可能か否かを基準に取捨選択され組み立て直されることを通して、初めてinstitution(s)の作動において取り扱い可能な「現実」として成立するのである。公的な文書としての「テキスト」作成には、人々が日常の言葉で知っていることを、専門化された概念カテゴリーに包摂する実践活動が含まれている。「二つの知ること」がある種の非対称的なやり方で接続されるのは、この「テキスト」作成のワークの過程においてなのである。

「実際に起こったこと」の公的な記述・記録・報告としての「テキスト」作成は、組織や機関や施設が日々のルーティン・ワークを遂行する際の基盤であり、人々がinstitution(s)と接触する際に必ず行なわれる実務である。日常生活における個別具体的な経験は、印刷されたものであれ、電子的なものであれ、複製可能な物質として組織間を流通する「公的な文書」として記録される必要がある。諸組織や諸機関や諸施設において異なる時間、異なる空間で実際に日々の実務に関わる人々の多様なワークは、「テキスト」を媒介にして相互に連係(coordinated)されている。例えば、診察における医師と患者のやりとりには、後続する一連の行為－診断、治療法の決定、薬の処方など－が存在する。それらの諸行為を連係しinstitutionalな過程を実際に動かしていく媒介になるのが、「患者」に何が起こったのかを記録した「テキスト」である。『82年生まれ、キム・ジョン』で呈示されるカウンセリングの記録は、後続する実務に必要な「テキスト(診断書)」作成の過程で生み出されたものと考えられる。

この「テキスト」作成の過程には、「実際に起こったこと」のうち、institutionalな言説の内部で記述可能な側面を選択していくワークが含まれている。人々が自身の経験に基づいて語るとは、そのままでは、institutionalな過程を動かさうとする「現実」たりえない。人々が語ったことは、それぞれの専門的言説における「知識の対象」として弁別的なやり方で定式化し認識できるような形式で記述される必要がある。例えば医療機関において「診断」や「治療」や「薬の処方」を行なうための「テキスト」は、医学的に名前のつく「病気」の事例の記録になっている必要がある。この意味でこの「記録」は、人々が自身の経験に基づいて語ったことを単純に表象しているわけではない。むしろそれは、人々の経験を、institutionalな言説の枠組み、概念、カテゴリーの例や表現として包摂する手続きによって組み立てたものとして捉えられるのである。

特定の視点から自身の身体的存在や身体的行為において生じたものとして知っていることとしての「実際に起こったこと」は、「テキスト」作成の過程で、主体や行為体としての人々が消えた特定の視点を持たない「知識の対象」に転換される。institutionalな言説に習熟することとは、自他の身に起こったことを特定の視点を持たないやり方で書き、話し、聞き、理解する方法を身につけることでもある。このことは、教育や医療や行政や経営や法や学問などに関わる諸組織や諸機関や諸施設などで実務に関わる人々－専門的社会学者も含まれる－にとっては、専門的な教育や訓練を経て習熟することを求められる能力でもある。

スミスがinstitutionalな言説のこのような作用に注目するのは、人々の日々の生活が、公的組織や組織的実践活動の官僚的、専門的、その他の諸形式に深く依存していると捉えているからである。作成された「テキスト」は、異なる場所で、異なる時間に、異なる人々が読む(見る、聞く)ために繰り返し現れうるという特徴を持つ。「テキスト」がそれを使用する一つの場所から別の場所に移動しても認識可能に同一であるということは、行政・経営・専門組織がその弁別的な機能を果た

すために不可欠である。諸組織や諸機関や諸施設において異なる時間、異なる空間でなされる人々の多様なワークは、「テキスト」に媒介された言説によって相互関連的に連係される。そのことを通して、人々の個別具体的な毎日毎夜の生活を外側から規定する何らかの決定が下されていくのである。institutionsは、実際に起こっていること、経験、進行中のこと、出来事を、公的組織(機関、施設)の法や目的によって定義し定義される客観化する記録システムへ置き換えるワークを行なう。このワークの考察なしには、日常生活世界を(専門知識人の言説における)カテゴリーを超えて見出すことができなくなる、とスミスは主張するのである。

3-2 「女性の経験」の抑圧

institutionalな言説は、教育や医療や行政や経営や法や学問などに関わる諸組織や諸機関や諸施設において直接的に実務が行なわれる場面を超えて、人々の毎日毎夜の生活の場面においても浸透している可能性がある。例えば、1975年初出の「女性と精神病」の議論をめぐる論考(Smith 1990a: 106-138)においてスミスは、北米において「mental illness(精神病)」という概念が、狭義の精神医学の領域を超えて、広く日常生活における自他の行為を意味づける枠組みとして使用されていることを示唆する⁽⁶⁾。

1960年代末までの北米において、女性が妻や母として家庭の中で家事や育児を一人で担うことは自明のことであった。仕事(work: ワーク)とはもっぱら「公的領域」における賃金労働のことを指し、家庭という「私的領域」において女性が「妻」や「母」として行なっていることがらに関して、彼女たちの考え、それに費やす努力や時間、それがなされる多様な物質的条件などは不問に付されていた⁽⁷⁾。個別具体的な「家庭」の中で「妻」や「母」が行なっていることは、あくまで閉じられた「私的領域」の問題として捉えられ、別の場所で別の時間－他の「私的領域」あるいは「公的領域」を含む－で他者たちが行なっていることとの関係で捉えられてはいなかった。それはあくまで「パーソナル」なことであり「社会的」なことではなかったのである。

スミスは、1950年代にイギリスから北米に移住し、カリフォルニア州バークレーで研究生活と結婚生活を同時にスタートさせた。彼女は、1950～60年代当時の北米西海岸における中産階級の結婚生活のスタイルにはなはだしい違和感を感じていたこと、しかしその感情を適切に言葉にして言い表すことができなかったことを振り返っている(Smith 1994)。イギリス時代、スミスは自分を自律した人間であると感じることができた。しかし、北米西海岸で既婚の女性として生きていく中で、彼女はそうした感覚を抱くことができなくなっていた。当時の北米の中産階級の既婚女性は、さまざまなみかけを維持しなければならなかった。すなわち、順調な結婚生活をおくっていること、まっとうな女性であること、献身的な母親であること、夫に主導権のあるセックスに応じ喜びを感じることを、家庭や友人や隣人とよい関係を築くこと、学校での子供たちの身なりをきちんと整えること、などのみかけである。彼女は当時のこうした夫婦関係になじめなかったが、かといって真っ向から否定することもできなかったという。

スミスは、自分の本当の興味関心を押し殺し、夫に従うという当時の北米中産階級女性にとっての適切なスタイルを身につけようと努力した。こうしたことは決してうまくいかなかったが、彼女はそのことで自分を責めた。夫は、彼女を非難し、怒り、当惑した。二人とも、当時主流とされていた夫婦関係をなんとか実現しようとしていた。また、そうした夫婦関係の構築に失敗しているのは自分たちだけであると考えていた。彼女は大学院で学び、また研究助手として働くかわら、家の中の仕事を何もしない夫に代わって、家事や育児を全て引き受けていた。当時スミスは－そして

妻である彼女だけが－状況を打開しようと、何人ものセラピストのもとへ通ったのである。

人々は、自分たちがあてにする正常性(normality)を創り出すために、お互いに信頼し合うのだとスミスは指摘する。これは、単に期待や規範の問題ではない。むしろ、ある人の行なうことや言うことが、いかにして別の人の行なうことや言うことの条件になり、文脈になり、「次に起こること」になるのか、という問題なのである。ものごとをうまくやっていくこと、おきまりのやり方で続けることは、他者の行なうことによって提供される普通の質感(texture)や内容に依存し続ける。誰かが日常の正常性を生み出す進行中のワークを分裂させたり組織しない時や、彼女を境界線に連れ戻す日常の尺度が作動しない時は、精神医学のinstitutionsが呼ばれることになる(Smith 1990a: 134)。「mental illness(精神病)」という概念は、日常生活における相互行為の中で互いがあてにする「正常性」に齟齬をきたした時に、自他の行為を意味づける枠組の一つとして使用され、人々を精神医学のinstitutionsへつないできたのである。

毎日／毎夜の諸現実の達成において人々が相互依存しているということは、それらの諸現実に対する力と統制に関して、それらの諸現実に参加するやり方に関して、人々が平等であるということの意味するわけではない。「女性と精神病」の議論をめぐる前述の論考の中でスミスは、「精神医療化された」物語と相反する自分自身の別の物語を語ろうとする女性たちの試みが、精神医学のinstitutionalな言説によって抑圧され、そのような力の不平等が黙認されてきたメカニズムを探究する。

自らの結婚生活に対する違和感－スミス自身が経験したような－について女性たちが語る物語は、もし真面目に扱われれば、もし全部をそして適切に聞かれるならば、そして特に変化を起こす基盤として聞かれ扱われるならば、家庭や家族の局所的に確立された当時の秩序を崩壊させる可能性があった(Smith 1990a: 134)。スミス自身が実際に経験したように、そもそも、これまで自明視されたきた「家庭」や「家族」の局所的秩序をめぐる「違和感」を適切に言語化すること自体が、当人にとってさえ非常に困難なことであった。そのことが原因で家庭内での具体的な他者との相互行為において感情がコントロールできないような状態に陥った場合、それはまさに「誰かが日常の正常性を生み出す進行中のワークを分裂させたり組織しない時」あるいは「彼女を境界線に連れ戻す日常の尺度が作動しない時」と受け取られ、そのような事態に直面した他者たち－例えば夫－を当惑させたのである。

精神医学は、脅かされている局所的秩序において力を持つ位置にいる人々－世界についての自分たちのワーキング・ヴァージョン(working version of the world)を維持しようとする人々－にとって、頼みとされてきた。別のヴァージョンを拒絶するための「客観的」根拠を提供することにおいて、精神医学は既存の局所的秩序に権限を与えていたのである(Smith 1990a: 134)。

一方に、人々の生活で起こること、実践活動やワークの局所的で個別的な組織化－その中に人々の生活の経験が埋め込まれている－が存在する。もう一方に、精神医学の超局所的な装置が存在する。後者は、現代社会のテクスト的に媒介されたinstitutionalな過程の一部であり、保護的(custodially)に構造化された医療施設、専門家(精神科医、心理学者、精神医学的ソーシャルワーカー、精神医学的ナース)や、institutionsを作動させるための知識源としてのアカデミックで専門的な言説や、関連する法的な力や特権や条件が含まれている。この接点(juncture)において、「女性の経験」は「精神医学的概念」に置き換えられ、「起こったこと」は「患者」となった当人の「病気」の問題として取り扱われていった。家庭という局所的な相互行為場面で起こった「不可解な出来事」が、それに関わる家庭内外の複数の他者たちとの行為の連係において生じている可能性は、不問に付されていったのである。

3-3 「女性の経験」をめぐる二つの「知り方」

スミスは、(近代)社会において広く浸透している「女性」のあり方と矛盾するような「女性の経験」が、institutional な過程において抑圧されてきたメカニズムを、Diane Harpwood の小説『Tea and Tranquillisers(お茶とトランキライザー)』における一つの象徴的エピソードを使って説明している (Smith 1990a: 163-173, Harpwood (1982))。この小説は、若い主婦の毎日の生活の日記である。彼女は二人の子どもを持ち、彼女の夫は仕事人間で愛情深く、子育てや家事を全く手伝わない。問題のエピソードは、ある物語を語ることにについての、ある物語を語る。最初に、彼女は何が起きたかを語る、彼女自身の物語を語る。次に、彼女は精神科医に語られたものとしての物語を語る。それは彼女の夫によって書き留められ、彼女によって話された物語だ。

28日土曜日。私は今夜家を出た。巢から飛び出した。逃げ出した。私はもう十分だ。いわゆる「必要以上のものを持って無駄」なのだ。私の場合うんざりだ。で、なじみのわが家の雰囲気は今夜はずっと、少し寒かった。私は朝六時半から立ちっぱなしだった。私のお尻は一日中ほとんど椅子に触れることはなかった。ベッドを整えて、整頓して、汚れたオムツを替えて、整頓して、汚れたオムツを洗って、整頓して、準備して、料理して、朝食と昼食とお茶の後片づけをして、皆の靴にくっついて中に運ばれてくる固くなった食べ物やいろんな汚物のかけらで永遠に汚れている台所の床を洗って、今日だけは別、今日はしばらくのあいだ床は清潔だった。こういった雑用のすべてが、あの群れがいる中で遂行されていった。「恐るべき子どもたち」、かれらは今日はそうだった、「私も」がスクラムを組んで波のように家のあちこちから押し寄せた。今晚私は子どもたちを風呂に入れた、私たちが去年の9月に買った時からひもで括られ巻かれた状態のまま横たわっている新しいカーペットをかれらは必ず濡れにした。私はかれらを、パパにお休みを言うために連れて行った。かれらが父親の名前を覚えていることを確かめるために、私はいつもそれをする。私はかれらを寝かしつけ、おもちゃを片づけて、私は自分でお酒を作りに行った、私はそれを一人きりで飲むつもりだった、私だけしか座れない椅子で。彼は私が言っているのを聞いた、それはやかんの蓋のことだったに違いない、そして彼は私に言った。「ねえ、お茶入ってるの?」彼は言った。それで私は怒りで分別を失った、彼の声を聞いたショックと、何か一人でしょう、私だけで、一度でいいから、という計画をくじかれたことのショック。それで私は食器棚からコーヒーの瓶の代わりにジャムの瓶をとって、それを落とした。それは粉々になった、致死のガラスの破片を撒き散らしながら、そして、私の輝く清潔な床中に赤いジャムを塗りつけながら。それは我慢の限界だった、究極、私の自己コントロールへの致命的強打、そして私は悪態をついた、自分の周りで起こっているあらゆることに対して見ない、聞かない、言わない怠けた状態で座っている彼について卑猥なことを叫んだ、そして私は泣きはらしていた。彼は言った、ジャムの蓋を落としただけだお願いだから、と。そのことがこれをやったのだ。私は彼に出ていけと言ったが、彼が口を開けて立ったままに、私が出て行った。私は急いでコートを着て、扉をぱたんと閉めてスリッパで家を出た・・・私はどこへ行くべきか、行くべき場所がどこにあるのかわからなかった・・・。(Harpwood (1982: 12-13) 引用は Smith (1990a: 135))

のちに、彼女の夫である David は、彼女は医者に行った方がよいと提案し、彼自身で手配すると申し出た。精神科医の診察についての彼女の記述(account)の中には、起こったことの夫のヴァージョンが、医者診療室で彼女によって話されたヴァージョンになるやり方を見ることができる。

二番目の物語はとても一面的だ。「起こったこと」として話されているが、それは実際は彼女から彼女の夫へと中心が移っている。この物語には、彼が直接関わっているシークエンスだけが含まれているのである。「公式のヴァージョン」は、日々のルーティン・ワーク—の中で、彼女自身の欲望に対するフラストレーションや否定が蓄積し、彼女の満足の瞬間が妨げられた時にあふれ出したのだ—についての彼女の物語がなくなっている。二番目の物語は、何が起こっていたのかや夫への彼女の怒りを理解するであろう全てのことが失くなっているのである。

[Davidは]今夜5:30に帰ってきた。そして私たち全員を車に乗せた・・・Dr. Andrewsに何と言おうかパニックになっていたので、Davidが先週の土曜の夜に提案し記述したように話した。涙があふれて止まらなかったことなどを。私がジャムの瓶を落としたからだ。それはばかばかしく聞こえるに違いない。彼は何が悪いのかすぐにわかったようだった、彼は多くを語らなかった、すごく混んでいて、待合室も立っているしかなかった。彼は私の目をのぞき込み、手を前に差し出すよう言った、処方箋を書いた、どのようにいつ薬を飲むかを私に言った、彼は私に2週間後にまた会うことを望んだ。私は、彼が何を処方したのか、彼がなぜそれを処方したのか知らない。わからなかった。私はとても混乱していたし、問いただして彼の時間を無駄にすることに当惑していた。でも私は気分が少し良くなった。なぜなら、彼は私を助けられると確信しているようだったから。

Davidは、私の処方薬を取りに行くために明日ちょっとベントンへ出かけてくると言う。

(Harpwood(1982:12-13)引用はSmith(1990a:136))

ここでは、主人公である彼女自身が、自分の行動についての記述(account)を彼の視点から生産しながら、自分の物語を夫から借りている。それゆえ、話されたストーリーは実際意味を欠いている。たまたまジャムの瓶を落としたことが、夫に対する怒りの異常な爆発を引き起こす。このバージョンは、精神科医によって疑問なく受け入れられ、これをもとに彼はトランキライザーを処方する。医師の処方箋は夫の立ち位置を承認する(ratify:きちんとした書式で承認する)。それは主人公の状況を変えない。彼女の感じる感情を変えるだけである。

このエピソードに象徴されるのは、既存の社会のあり方に対する何らかの問題提起を含んでいるような「女性の経験」に対して、北米における精神医学の諸機関は、社会において標準化された「正常性」のヴァージョンを取り締まるように機能し、結果として、そのような「経験」を不可視にする役割を担ってきたことである⁽⁸⁾。スミスは、感情や精神の状態を、生きられたアクチュアリティから概念的に切り離すことは、それらを変化や行為や力の可能性から断ち切ることだと指摘する(Smith 1990a:137)。感情や気分や感覚を—精神療法やトランキライザーや電気ショックなどによって—治療されなければならないものとして定義する⁽⁹⁾精神医学のワークは、それらを将来の(prospective)行為から切り離す。投薬や他の方法によって、人々のエネルギー、とりわけ「怒り」を取り除こうとすることについて、スミスは次のように述べる。

苦しみから離れようとするための、あるいは、それが何であるかいつも言えないことに対する、ひとりの女性の抵抗、もがき、努力は、局所的に認可された毎日／毎夜の諸現実を崩壊させ分離するような行為や発話において表現されている。・・・彼女たちの動きやエネルギーの論理は目には見えない。患者を治療している医療や精神医学の当局者は、彼女が崩壊させる確立された秩

序を支持する。彼女は主体として聞いてもらえない。彼女は、異なる秩序作りに参加することから、さらに絶縁させられる。したがって、動こうともがくことにおいて、彼女は試金石を持たず、フィードバックを持たず、効果の可能性を持たず、他者に対しても自分に対しても理解できるであろう行為と反応の文脈を発展させる可能性を持たない。その上、生きられた世界の所与の秩序を作り変える欲望や努力としての感情や行為や発話の有効性を否定する精神医学の文脈によって加速する、混乱の渦の激化を想像してみてほしい。(Smith 1990a: 137-8)

4. 「テキスト」作成と二つのナラティブ

4-1 institutional な過程における記録つけのワーク

スミスが取り上げた『Tea and Tranquillisers』のエピソードにおいて、主人公の最初の記述では、夫に対して怒りを爆発させるに至るまでの経過が、その日一日に起こったことの順を追った詳細として語られていた。しかしながら、後日夫の勧めで訪れた精神科の診療室で彼女が語ったこととして記述されているのは、夫が直接関わっているシークエンスのみが含まれている、夫の視点からの物語であった。この2番目の記述では、「怒り」という感情が爆発するまでに彼女が一日をどのように過ごしてきたのかや、なぜその瞬間に夫への怒りが爆発したのかを説明する、全てのことが省略されていた。この時点で、主人公の行動や感情に正当な理由を与えるような社会的文脈は彼女自身によって既に排除されており、彼女は「精神医療化された」物語と相反する自分自身の別の物語を語ろうとはしない。「たまたまジャムの瓶を落としたことが、夫に対する怒りの異常な爆発を引き起こした」という出来事の記述は論理的なつながりを欠いているが、精神科の診療という文脈においてはむしろ適切なものとなる。このバージョンは精神科医によって疑問なく受け入れられ、「病氣」の「治療」のために薬が処方される。

実際のinstitutionalな過程においては、「診察」と「薬の処方」の間に、診察に訪れた人が語ったことを医学的に名前のつく「病氣」の事例(ケース)として記録する「テキスト」作成のワークが介在している。福祉や精神医学の文脈において、関連する諸組織には、対象になる個人に焦点が合わせられた複数のワークを配置していく特徴的な形式があるとスミスは指摘する(Smith 1990a 89-93)。そこにおいて個人は、かれらの記録の解釈的管理の下で、「ケース」として認識される。何らかの決定が下される時には、かれらの現在の状態が、かれらの過去の文書の軌跡において見出されるのである。

ケース・ヒストリー⁽¹⁰⁾やケース・レコードという「テキスト」は、19世紀後半以降都市の人口増加と匿名性に直面した行政の「知識装置」として発展した。専門家の専門的言説が確立されると、それらの「テキスト」は、専門的行政の実務であるとともに、専門的言説の基礎となる知識の一部となった。それらを書くための方法的手続きが開発され、記録が標準化されたやり方—個人ごと、病院ごと、クリニックごとの特異性としてではなく—で集められることを確かにした。観察や探究の標準化された方法、カテゴリー、解釈枠組や実践活動などが、関連する専門的諸言説において発展されたのである。ケース・ヒストリーやケース・レコードは、典型的には、情報の全ての主要な項目が、報告書の主題に属するものとして現れてくるように構造化されている(Smith 1990a 89-90)。

精神医学における「病氣」と定義されるようになる「個人に起こったこと」は何であれ、もともとは、彼女が生きているところで、彼女の経験の具体的でアクチュアルな文脈において、他者たちとの関係において起きたはずである。もともとの文脈では、その他者たちの世界と経験は、かれらと共にいる彼女の世界と経験と交わっているはずである。しかしながら、精神医学的「ケース」の記

録としての「テキスト」の組織化は、個人を、(他者たちもまた行為している状況の一部としての)彼女の行為が生起する文脈から分離する役目を果たす。彼女は「治療」のために、彼女の行なうことを彼女の生きているアクチュアリティや特定の文脈から切り離す過程へ連れて行かれることになる。その結果、彼女が行なうことは、彼女に結びついてはいるが、彼女の状況からは切り離されているように見えるようになる(Smith 1990a:92)。起こったことの「不可解さ」は、彼女個人に帰属されるようになるのである。

「個人に起こったこと」を文脈化する全てのことは、見えなくされるか、「ケース」の記録にまとめて(package)提示されることになる。精神医学的「診断」がなされる地点に患者が到達した時、彼女は、単なる、「知識の対象」である「病気」について話す存在として、「テキスト」の束の中へ抽象化されている。このような知識の社会的組織化の効果は、完成した「テキスト」に記録されている公式の事実報告(factual account)においては認識することができない。institutionalなワークの対象となる人々の「生きられた経験」と、institutionalな言説の秩序の内部でそれらの表象を産出する「テキスト的現実」の間には断絶があるが、そのことは不可視にされる。ケース・ヒストリーやケース・レコードという「テキスト」は、ひるがえって、精神医学やソーシャル・ワークなどに関連する領域の専門家の理論化にとって基盤となる主要なデータとなる。事実報告作成における、方法的手続きとそれによって生み出される「事実」の巡回(circuit)によって、「何が起こったか」を別様に記述し考察する可能性は不問に付されていくのである。

前述したように、「実際に起こったこと」の公的な記述・記録・報告としての「テキスト」作成は、組織や機関や施設が日々のルーティン・ワークを遂行する際の基盤であり、人々が institutions と接触する際に必ず行なわれる実務である。人々が自身の経験に基づいて語るとは、そのままでは、institutionalな過程を動かさうとする「現実」たりえない。人々の経験を、institutionalな言説の枠組、概念、カテゴリーの例や表現として包摂する手続きによって組み立て直すことは、諸組織や諸機関や諸施設がその社会的機能を果たすために不可欠なワークであり、現場で日々実務に関わる人々にとっては専門的な教育や訓練を経て習熟することを求められる能力である。スミスは、institutionalな過程において日々「適切に」遂行されるルーティン・ワークの中に埋め込まれているが不問に付されている、このような知識の社会的組織化に、1960年代末以降の女性解放運動によって提起された「女性の経験」のメカニズムを見出したのである。

4-2 プライマリー・ナラティブとイデオロギー的ナラティブ

この点についてスミスは、ある特定の個人の個別具体的な経験がinstitutionalな過程に接続する際に顕在化する経験の二つの物語－プライマリー・ナラティブ(primary narrative: 最初の物語)とイデオロギー的ナラティブ(ideological narrative: イデオロギー的物語)－と、両者の非対称的な関係に着目する(Smith 1990a:141-173: 初出は1983年)。「プライマリー・ナラティブ」とは、人々が実際の経験をもとにそれを回想しながら作り出した記述(account)である。institutionalな過程との接点で生み出されるが、「テキスト」とは別のやり方で作り出される記述である。「イデオロギー的ナラティブ」とは、プライマリー・ナラティブを、専門家の言説によって組み立て直し、包摂し、置き換えるように作り出された記述である。

「個人に起こったこと」を記録する「テキスト」作成の実践活動において二つの物語は交差し、言説の普遍化された枠組や概念やカテゴリーが、プライマリー・ナラティブの局所的な経験の記述に挿入される。この過程において、多様で個別的な局所的経験の記述は、支配する諸関係の抽象的な

管轄(jurisdiction)の内部の、同じ概念の「例」や「表現」として包摂され再構築されていくとスミスは指摘するのである⁽¹¹⁾。何かを指示したり表象したりすることは、それ自体一つの言語使用実践活動として捉えることができる。「個人に起こったこと」を写し取ろうとする言語使用実践活動において、二つの語り方の非対称的な関係が社会的に組織化される。このメカニズムの解明が、スミスの社会学の論点となる。

プライマリー・ナラティブとイデオロギー的ナラティブは、それを構築する方法と読む(理解する)方法の両方において異なる言語使用実践を行なっている。スミスは、用語を選び、記述の文法的、論理的、因果的つながりを生成する解釈スキーマという点からこのことを論じている。

プライマリー・ナラティブとは、経験を再現するための一つの言語的技術である。そこにおいては、節(せつ: clause: 主語と述語からなる基本単位)の連鎖は経験の日常の時間的な連鎖に一致し、出来事を日常の文脈に埋め込むように接続されていく⁽¹²⁾。

例えば、もしある人が暴漢から逃げてきて、通りの反対側に横切った後でつまづくときに何が起るか、そこにたどり着く前につまづくときに何が起るかの違いを、私たちは知っている。「そしてかれらは私に追いついてきた／そして私は通りを横切り／そして私はつまづいたんだ」は、「そしてかれらは私に追いついてきた／そして私はつまづいたんだ／そして私は通りを横切ったんだ」とは異なる連鎖である。二番目の連鎖における、「私はつまづいた」と「私は通りを横切った」の間には、つながりが欠けているように見える。仮に二番目の連鎖をスムーズに読むためには、「私はつまづいた」と「私は通りを横切った」の間に、両者をつなぐ別の節を挿入する必要がある。このとき私たちは、日常世界における自身の経験を資源として導入し、二番目の連鎖における言われなないピースを正したり、埋めたりしている可能性がある。

スミスは、最初はこの欠けたピースを、「そして私はかれらが私を捕まえる前に起き上がった」という節で補った。彼女は、「私はつまづいた」という節を、その主体・主語(subject)が転んだという意味として読んでいた。しかしそのことに気がついた後に彼女は、彼は転んではいなかったかもしれない、おそらく彼は自力で立て直したのだ、というように解釈を変えていったという。プライマリー・ナラティブにおいては、節と節の連鎖における明示的に言われていないピースを正したり埋めたりする際に、語られた経験と関連する、聞き手(読み手)自身の経験を解釈資源として用いることに特権が与えられている。この関連は、「私はまさにどのようにして彼女が感じたかを知っている」「かつて私に起こったまさにそのようなこと」のような言い方の中で、聞き手(読み手)によって表現される可能性がある。

プライマリー・ナラティブにおいては、起こったことの連鎖は経験の記憶から引き出されていく。その記憶は、ナラティブの様式としてあらかじめ秩序づけられてはいるわけではない。したがって、プライマリー・ナラティブの記述においては、しばしば、思い出されたことが不完全であったり、途中で訂正されたりすることがある。プライマリー・ナラティブにおけるそれぞれの節の実際の位置づけが適切か否かは、最終的には、オリジナルな出来事の連鎖を基盤にして評価されることになる。解釈は原則として、そのナラティブが「再現している」元々の経験であるところの、オリジナルの経験に照らしてチェックされるのである。仮に、聞き手(読み手)の経験によっては、節と節のつながりの欠落を埋められない場合、その困難は、話し手に自身の経験について質問することによって解消される。プライマリー・ナラティブにおいては、元々の経験の主体が語る主体としての権利を有しているのである。

他方、イデオロギー的ナラティブはこのようなやり方では進まない。「テキスト」作成において、

もともとプライマリー・ナラティブの形式において与えられた素材に対して、イデオロギー的手続きが作動する⁽¹³⁾。institutionalな過程で、人々は警察に、検死官に、精神科医などに、起こったことを話す。そこにおいて、彼らは自分の経験を引っ張ってきたり、それを参照したり、それに基づいて何が起こったかの記述を正したりする。このようなプライマリー・ナラティブは、「起こったこと」をイデオロギー的ナラティブへ転換するための生の素材になる。「実際に起こったこと」は、公式の記録として適切な形式に置き換えられなければならない。そこでは、プライマリー・ナラティブから「何が起きたのか」の詳細事項(particulars)を選択し、組み立て、秩序づける何らかの方法を使うワークが行なわれているのである。

「テキスト」を作成する際に用語を選び、記述の文法的、論理的、因果的つながりを生成するための、あるいは「テキスト」を読む際に書かれた文章の関連やつながりを読み取るための解釈スキーマは、人々の元々の経験や出来事の連鎖からではなく、専門的言説から引き出される(Smith 1990a:160)。スミスは、「テキスト」を、それがその外にあるアクチュアリティを正しく表象、指示しているのかという論点というよりは、それがいかなる社会的な一連の行為に接続されているのかという論点において探究しようとする。この点については別稿で、ある具体的なケース・ヒストリーを題材にイデオロギー的ナラティブとプライマリー・ナラティブの関係を解明したスミスの論考に依拠しながら、(近代)社会において広く浸透している「女性」のあり方への疑義を含むような「女性の経験」が抑圧されるメカニズムについて引き続き考察していきたい。

5. おわりに

『Tea and Tranquillisers』のエピソードにおいて、夫に対して怒りを爆発させるに至るまでの経過をその日一日に起こったことの順を追った詳細として記述していた主人公の最初の物語(プライマリー・ナラティブ)は、後日夫の勧めで訪れた精神科の診療室では精神医療化された物語(イデオロギー的ナラティブ)に置き換えられていく。診療室において彼女が自らの経験に基づいて語ったプライマリー・ナラティブは、夫が直接関わっているシークエンスのみが含まれているものであり、「怒り」という感情が爆発するまでに彼女が一日をどのように過ごしてきたのかや、なぜその瞬間に夫への怒りが爆発したのかを説明する、全てのことが省略されていた。この時点で、主人公の行動や感情に正当な理由を与えるような社会的文脈は彼女自身によって既に排除されており、「たまたまジャムの瓶を落としたことが、夫に対する怒りの異常な爆発を引き起こした」という出来事の記述は論理的なつながりを欠いている。しかし、このバージョンは精神科医によって疑問なく受け入れられ、「病気」の「治療」のために薬が処方される。主人公の行動や感情の欠けた論理が、精神医学の知識や概念によって補われたことが示唆されるのである。

主人公は、北米の中産階級の既婚女性に求められてきた「まっとうさ」をついに維持できなくなるが、そのような経験の正当性を他者に対して説明する言葉を持たない。このエピソードは、生きられた世界の所与の秩序を作り変える可能性のある経験を、公的な場所で語るやり方も、語る主体としての権利を持たず、そもそも経験したことそれ自体を自ら否定せざるをえなかった、かつての北米の女性たちの「名前のない問題」の構図を象徴している。『82年生まれ、キム・ジョン』において最初の診療記録として呈示されている冒頭部分もまた、夫の視点から、夫が直接関わっているシークエンスを中心に構成されている。妻の行動に当惑した夫が、まず一人で精神科を訪れ、医師に妻の状態を説明して治療法を相談する。次いで診療にやって来た本人は自分の「症状」を自覚

していなかったが、精神科医からカウンセリングを受けてみることを勧められると、「最近気分が沈み、何事にも意欲が湧かず、育児鬱ではないかと思っていた」と医師の提案に感謝するのである(チヨ 2018:17)。

これらの小説のエピソードは、日々の生活において自分や他者の身に起こっていることを知るやり方が、公的組織や組織的実践活動の官僚的、専門的な諸形式によっていかにして組織化されているのかを示唆する。これらの小説が取り上げる精神科の診療とは、具体的・個別的・特殊的・主観的とみなされてきた日常の言葉(日常的知識)による「知り方」と、抽象的・一般的・普遍的・客観的とみなされてきた思考の言葉(専門的知識)による「知り方」が交わる institutional な場面の一つである。社会的な知識産出の場面において、二つの「知り方」の間には非対称性が存在する。前者の「知り方」は後者の「知り方」の基盤となるが、前者は後者に包摂されうるものとして扱われ、通常は表に出てこない。日常の言葉において知られたことは思考の言葉に置き換えられ、そもそも二つの「知り方」の間に断絶があること自体が不可視にされているのである。

スミスは、1960年代末以降の北米における女性解放運動によって提起されたいわゆる「名前のない問題」が生み出されるメカニズムを、このような社会的な知識の組織化のあり方に見出した。二つの「知り方」の接続点(juncture)において、「女性の経験」は「精神医学的概念」に置き換えられ、「起こったこと」は「患者」となった当人の「病気」の問題として取り扱われていく。家庭という局所的な相互行為場面で起こった「不可解な出来事」が、それに関わる家庭内外の複数の他者たちとの行為の連係において生じている可能性は、不問に付されていくのである。institutional な過程における社会的な知識産出のワークが依拠しているにも関わらず、公的な文書としての「テキスト」においては起こったこととして観察可能・報告可能にならない様々なことがらがある。このワークの考察なしには、私たちは自身の日常生活世界を、専門知識人の言説におけるカテゴリーを超えて見出すことができなくなるとスミスは主張するのである。

前述したように、スミスの社会学においては、局所的活動がそれを超えた行為の連鎖や連係に接続するやり方を、日常生活世界を実際に生きている人々が暗黙のうちに知っていることや行なっていることを出発点にして、実際にそれを経験する個別具体的な人々の立ち位置から知り直すやり方が模索されていると考えられる。ここで改めて論点となるのは、スミスの社会学が出発点にしようとする、日常の言葉(日常的知識)による「知り方」とはいかなるものなのかということである。これまで、具体的・個別的・特殊的・主観的とみなされてきた日常的知識を、スミスはどのように社会学的に位置づけようとしているのか。この点について、別稿で引き続き考察を行ないたい。

スミスの議論をふまれば、日常生活世界における局所的活動がそれを超えた一般的で抽象的な力によって組織化されていることの形跡は、人々が自分の日々の生活について語るやり方の中に発見されうると指摘する。私たちの日々の進行中の協働する(concerting)諸活動の社会的組織化のあり方は、私たちがそれらについて語るありふれた日常のやり方の中に一少なくともそれらについて具体的に話す時には一すでに表現されていると考えられるのである。局所的活動がそれを超えた行為の連鎖や連係に接続するやり方は、ある所与の場面においてある用語が意味を持つやり方において示唆されている。日常生活世界における個別具体的な社会的文脈における知り方を、脱文脈的な一般的化、抽象化された知り方へ置き換える institutional な言説のカテゴリーが、日常生活のありふれた記述やありふれた語りに埋め込まれている可能性があるのである。

この点において、『82年生まれ、キム・ジヨン』における、精神医学の枠組みを大きく逸脱していく精神科の診療記録が改めて注目される。ここでは「彼女自身が自ら選んで精神科医の前に広げ

てみせた人生の場面場面(チョ 2018:162)」が記述されている。カウンセリングを経て、精神科医は当初の「自分の診断が性急だった」ことを悟る。その上で「間違っていたという意味ではない。私がまるで考えも及ばなかった世界が存在するという意味である(チョ 2018:162)」と指摘される。このような気づきをもたらす出来事の記述とはいかなるものなのか。「一度話し始めるとかなり深層の部分まで自分から掘り下げ、筋道を立てて淡々と話してくれる(チョ 2018:162)」という「彼女自身」の記述の「筋道」のつけ方はいかなるものであるのか。この点について、さらなる社会学的な考察が可能であると考ええる。

個人の経験が何らかの「抽象的」で「一般的」で「普遍的」で「客観的」な力によって組織化されていくメカニズムを、抽象的・一般的・普遍的・客観的な思考の言葉(専門的知識)によって置き換えることなく、日常生活世界を実際に生きている人々が暗黙のうちに知っていることや行なっていることを出発点にして、実際にそれを経験する個別具体的な人々の立ち位置から知り直すことはいかにして可能になるのであろうか。この点について、引き続きドロシー・スミスの議論に依拠しながら考えていきたい。

注

- (1) 好書好日(2019)
- (2) この記述は、チョ・ナムジュ他(2019)における、筆者の言葉をまとめたものである。
- (3) 本論で *practice(s)* の訳語として、実践活動あるいは実務などの言葉を文脈に応じて使い分けている。日本語で多用される「理論と実践」のような使い方と区別するためである。というのも、スミスの社会学においては、理論は常に、それを書く、読む、話すという活動と結びついており、それ自体言語を使用する *practice(s)* として捉えられているからである。本論ではこの文脈での *practice(s)* には実践活動あるいは言語使用実践という言葉を用いる。
- (4) 後者の論点については別稿で詳述する。
- (5) *institution(s)* のこのような使い方については、エスノメソドロジー・会話分析による、*institutional* な場面研究における *institution* の捉え方も参照。Heritage and Greatbatch(1991:94) は *institutional* な場面を「そこにおいて多かれ少なかれ、正式(*official*)で公式(*formal*)な課題や役割に基づいた諸活動が引き受けられている場面」として定義し、具体的には、医者と患者の相互行為、法廷裁判、就職の面接、教室の授業、ニュース・インタビュー、警察の緊急通報を、このタイプの相互行為の明確な例として挙げている。
- (6) この点については、“K is Mentally Ill: the Anatomy of a Factual Account”(Smith 1990b:12-51(初出は1978年))も参照。
- (7) 1970年代の「家事労働に賃金を(*wage-for-housework*)」の理論家たちの議論により、ハウス・ワーク(家事労働)の拡張された概念が開発された。「家事労働に賃金を(*wage-for-housework*)」の理論家たちはワークという概念を、賃金関係における女性と男性の機能を維持しそれに仕えるために、したがって女性の労働を利用する企業を間接的に維持しそれに仕えるために、女性によって(時には男性によっても)行なわれてきた全ての仕事(ワーク)を含めるように使用してきた。このハウス・ワーク(家事)の気前のよい概念は、家庭内の労働固有のものだけではなく、「職場に行くために車を運転する、カフェテリアで昼食を食べる、サンドイッチを作り食べる、仕事で着る衣服を購入し繕う」などの活動も含まれている。日常生活のこれら全ての側面が、経済にとっては必要なのだ。しかし、家事はもちろんそれらの活動も、専門的言説に

- においては、通常仕事(ワーク)とは記述されないものだった。「家事労働に賃金を」の理論家にとって家事とは、実際は経済の一部でありながら通常仕事(ワーク)とは表象されず、消費と記述されるか、全く記述されないままのワーク過程を同定する、経済的カテゴリーになったのである。この議論をふまえスミスは、workという語の意味を、時間や努力や意思を必要とする人々の行ない全てを指すものとして使用している(Smith 2005:229)。
- (8)北米においては、1960年代末の女性解放運動をきっかけに、このような「女性の経験」を「社会の問題」として捉え直すやり方が開発されるようになる。1980年代以降のアカデミックな領域における「女性学(women's studies)」の制度化は、近代社会のinstitutionalな言説それ自体の変化を促していくことになる。
- (9)精神医学のテキスト(教科書)や言説はそれ自体変化する。ここでスミスが依拠しているのは主として1960~1970年代のテキスト(教科書)や言説である。
- (10)case history: 医学だけでなく、case studies(case workを含む)をするための基礎資料(家族歴/集団歴)である。
- (11)この点については、上谷(2020a)も参照。
- (12)プライマリー・ナラティブをめぐるスミスの議論は、LabovとWaletzkyの「オーラル・ナラティブ」の研究(Labov & Waletzky 1967)に示唆を受けている(Smith 1990a:157-160)。LabovとWaletzkyは、ナラティブを、「節(せつ: clause: 主語と述語から成る基本単位)の言語的連鎖を、実際に起こった出来事の連鎖と一致させることによって過去の経験を再現する一つの方法」と定義する。
- (13)ここで「イデオロギー」という概念を使うことにおいて、スミスは、一定の記述を生成するための「イデオロギー的な手続き」と「科学的手続き」を対比したり、「偏った手続き」と「偏らない(客観的な)手続き」を対比しようとしているわけではない。ここでは、「実際に起こったこと」の一つの客観的記述が存在することが想定されているわけではないのである。スミスの議論において、イデオロギー的ナラティブとプライマリー・ナラティブの違いは、正確性や完全性や真実ということではない。また、実際に起こったことの完全な表象があると考えられているわけでもない。そもそも、どちらの語り方が実際に起こったことを「正しく」表象しているかという、表象主義的言語観それ自体が取られていないのである。
- むしろここで着目されている両者の違いは、語ること、知ること、解釈することの「やり方」にある。スミスの議論においては、「実際に起こっていること(actuality)」は、何らかの形で記述されて初めて現れてくるものとして捉えられている。経験されたことは、話すことや、聞くことや、読むことの成員の方法において、他者にも認識可能な社会的な出来事となりうるのである。イデオロギー的・ナラティブとプライマリー・ナラティブは、社会的な出来事の異なる二つの語り方、言語使用実践活動である。ここで注目されているのは、人々が自分の生きられたアクチュアリティの特定の時間と場所の内側から何が起きているのかを経験し、話し、理解するやり方と、institutionalな過程に接続し(その過程に不可欠な一部である)公式化された没人間の知ることの様式との裂け目である。出来事の二つの語り方は、それら双方が意図するアクチュアリティとの関係で、異なったやり方で位置づけられていると考えられるのである(Smith 1990a:157)。

文献

- Deirdre Boden and Don H. Zimmerman(1991) *Talk & Social Structure : Studies in Ethnomethodology and Conversation Analysis*. Polity.
- Judi Chamberlain(1975) Struggling to be Born. in Dorothy E. Smith and Sara J. David(eds.) *Women Look at Psychiatry*. Vancouver: Press Gang. pp.53-57.
- Diane Harpwood(1982) *Tea and Tranquillisers: the Dairy of a Happy Housewife*. London: Virago.
- John Heritage and David Greatbatch(1991) 'Institutional Talk : News Interviews' in Boden and Zimmerman (1991)
- L. C. Kolb(1977) *Modern Clinical Psychiatry*. Philadelphia: W.B.Saunders.
- W. Labov and J. Waletzky(1967) 'Narrative analysis: Oral versions of personal experience.' in J. Helm (ed.) *Essays on verbal and visual arts*, Proceedings of the 1966 Annual Spring Meeting of the American Ethnological Society, Seattle: American Ethnological Society / University of Washington Press.
- チョ・ナムジュ(2018)『82年生まれ、キム・ジヨン』筑摩書房
- チョ・ナムジュ、川上未映子、斎藤真理子、すんみ(2019)「『82年生まれ、キム・ジヨン』、『ヒョンナムオッパへー韓国フェミニズム小説集』刊行・著者来日記念トークイベント」(2021年3月17日取得 <http://www.webchikuma.jp/articles/-/1680>)
- チョ・ナムジュ×斎藤真理子(2020)「特別対談 未来のキム・ジヨンのために」(2021年3月17日取得 <http://www.webchikuma.jp/articles/-/1967>)
- 毎日新聞(2020)「女性のつらさ社会に問う」2020年10月24日夕刊
- Dorothy E. Smith(1987) *The Everyday World as Problematic : A Feminist Sociology*. University of Toronto Press.
- — —(1990a) *The Conceptual Practices of Power : A Feminist Sociology of Knowledge*, Northeastern University Press.
- — —(1990b) *Text, Facts, and Femininity : Exploring the Relations of Ruling*, Routledge.
- — —(1994) "A Berkeley Education." in Meadow-Orlans, Kathryn p. & Ruth A. Wallace(eds.) *Gender and the Academic Experience : Berkeley Women Sociologists*. Lincoln : University of Nebraska Press. pp.45-56.
- — —(1999) *Writing the Social : Critique, Theory and Investigations*. University of Toronto Press.
- — —(2005) *Institutional Ethnography : A Sociology for People*. Altamira Press .
- 好書好日(2019)「『82年生まれ、キム・ジヨン』はなぜ支持される？ 翻訳者・斎藤真理子さんが徹底解説」(2021年3月17日閲覧 <https://book.asahi.com/article/12109416>)
- 上谷香陽(2010a)「ドロシー・スミスにおける社会学的記述の問題—institutional ethnographyという視点」『ソシオロジスト』12(1)pp.73-96. 武蔵社会学会
- — —(2010b)「対話としての『経験』—ドロシー・スミスの視点」『武蔵大学総合研究所紀要』no.19, pp.117-133. 武蔵大学総合研究所
- — —(2017a)「日常生活世界から社会を知る方法—ドロシー・スミス『女性の立ち位置からの社会学』の着眼点」『文教大学国際学部紀要』27(2)、pp.1-16. 文教大学国際学部
- — —(2017b)「日常生活世界の記述可能性—ドロシー・スミス『制度のエスノグラフィー』の着眼点」『文教大学国際学部紀要』28(1)、pp.1-22. 文教大学国際学部
- — —(2018a)「テキストに媒介された言説とイデオロギー・コード—ドロシー・スミスの institutional ethnography をめぐって」『文教大学国際学部紀要』28(2)、pp.1-20. 文教大学国際学部

- — —(2018b)「社会を知るもう一つのやり方—ドロシー・スミスに依拠して」『文教大学国際学部紀要』29(1)pp.1-18. 文教大学国際学部
- — —(2019)「ドロシー・スミス Institutional Ethnography におけるワークおよびワーク・ノレッジ概念の検討」『文教大学国際学部紀要』30(1)、pp.1-16. 文教大学国際学部
- — —(2020a)「研究ノート：経験を語る二つの様式の断絶—知識の社会的組織化をめぐるドロシー・スミスの着眼点」『文教大学国際学部紀要』30(2)、pp.55-68. 文教大学国際学部
- — —(2020b)「研究ノート：「社会」という言葉を使って Society について考えるということ—柳父章の翻訳日本語論を手がかりに」『湘南フォーラム』24、pp.109-122. 文教大学湘南総合研究所
- — —(2020c)「ドロシー・スミスの社会学における institutional discourse について」『文教大学国際学部紀要』31(1)、pp.1-14. 文教大学国際学部
- — —(2021)「研究ノート 社会学的記述における二重の関係について—ドロシー・スミスに依拠して」『文教大学国際学部紀要』31(2)、pp.89-104. 文教大学国際学部

